



TITLE:

# 十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて

AUTHOR(S):

青盛, 和雄

---

CITATION:

青盛, 和雄. 十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて. 經濟論叢 1939, 49(4): 635-650

ISSUE DATE:

1939-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131304>

RIGHT:

經濟學叢論 每月一日發行  
第四十卷第四號 昭和十四年十月一日發行  
大正四年六月二十一日第三號發售可

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第四號  
昭和十四年十月

(禁轉載)

## 論叢

利率決定者としての銀行……………文學博士 高田保馬  
調査論……………經濟學博士 蜷川虎三

## 時論

稅制改革論……………經濟學博士 汐見三郎  
戰時統制經濟下の産業組合……………經濟學博士 八木芳之助

## 研究

前漢書貨殖傳に見はれたる經濟思想……………經濟學士 穗積文雄  
聖トマスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造  
十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて……………經濟學士 青盛和雄

## 說苑

貨幣數量説の諸形態とその吟味……………經濟學士 青山秀夫  
十六世紀の原價計算……………經濟學士 岡本愛次

## 附錄

彙報  
外國雜誌論題

# 十九世紀末葉の人口論者ハンセンに就いて

青 盛 和 雄

## 一 序 説

今から恰度五十年前に當る一八八九年十月に、「人口三序論」と題し、「國民の繁榮と頽齡の原因を探究せんが爲の一試論」と副題せる著作を發表して、艱難なる時局に對處すべき方策を考究せるゲオルク・ハンセン博士 Dr. Georg Hansen は茲に回顧さるべき時機に際會してゐると謂ふべきであらう。

十九世紀末葉の人口論者である我がハンセンは世に餘り知られて居らない。之を十八世紀末から十九世紀初に掛けての人口論者マルサス T. R. Malthus (1766—1834) の盛名に比較すると、懸隔の甚だしきを慨嘆させられるばかりである。先にマルサスの生誕百五十年を記念したる我國の人口論界は<sup>2)</sup>應ては百年忌マルサス研究で以て彼と缺別するかの如くであるが、果して誰を以て現代的人口論を説かんとするのであらうか。若し偉人の記念と云ふやうなことが意味ありとすれば、茲に問題とするハンセンの如きは其の著作發表後の五十年を以て一時期を劃さるべき人物であるだらう。

- 1) Dr. Georg Hansen; Die drei Bevölkerungsstufen. Ein Versuch, die Ursachen für das Blühen und Altern der Völker nachzuweisen, München, 1889. S. V + S. 407.
- 2) まるさす生誕百五十年記念號經濟論叢、大正五年五月。
- 3) 百年忌記念マルサス研究小樽高商編、昭和九年十二月。

されば一九一五年三月此書の複製版刊行に際して序文冒頭にクレマー Kraemer, Hermann Dr. (1872—) は大戦の眞只中に於て次の如く曰ふ。<sup>4)</sup>

「凡そ書物の運命程世にも儚いものは他に餘り類例が無いであらう。元來書籍は人間とは異つて、假令世人から不當なる取扱を受けようとも、直ちに立上つて之に反駁する口を持たないから、全く人心の注意圏外に置き去りを喰つて、其書が當然享くべき社會的評價さへ與へられぬ場合があつても、全く如何とも爲し難いのである。併し斯様な心理學的な比較的短い時間に於ては何等の反響も見られぬにしても、次いで来る長年月の時代的變遷が見舞ふと、今度は世人の方が往々にして變化してしまひ、昨日は枝葉末節の如く思はれたものを、今日は熱狂的な歡呼の嵐を以て迎へるといふことすら有り得るのである。」

然るに歐洲の天地を震撼せしめた第一次世界戦争の時から、早くも四半世紀の星霜を闊した今日に於て、再び西歐の空模様は風雲急なるを思はしめるものがあるにも拘らず、クレマーの稱するが如き時代的變化が何故にハンセン説の評價を高揚せしめ得ないのであらうか。

ハンセンの人口論に就いては別に説くとして、茲では唯ハンセンの傳記の不詳が其の人口論の普及を妨げたものとして、彼の略傳に就いて研究して置きたいと思ふ。

其故に吾々は先づ既往のハンセン説紹介に於ける原著者への無理解を指摘し、次いで發見されたる略傳を記述し、之と著作との關係を論證することに依り、今まで暗黙裡に葬り去られんとして居た著作の運命を打開し、云はゞ新しい解釋の下に本著を見直したいと庶幾ふのである。従つて吾々は著者の死後幾十年を語り、誕生百何年祭

4) G. Hansen; Die drei Bev.-stufen. Neue Ausgabe mit einer Einleitung von Dr. H. Kraemer, S. III.

5) 小泉信三著マルクス死後五十年、昭和八年七月。

を數へるものではなく、五十年以前に何處からか知らぬが、既にドナウ河畔のノイブルグ Neuburg an der Donau に移り住んで居たハンセンが多年考究の結果發表せる人口論著を記念せんと欲するものであり、其が五十年經過後の今日に於ても猶生々たる刺戟を吾々に與へるのは何故であらうかと思ふの餘り、敢て彼の生涯を探索し、彼の呼吸せる時代を偲んで見たいのである。斯くして初めて文は人なりといふ比喻の如く、著作を讀むに連れて次第に著者の風格が明瞭になつて、遂にはより多くの讀者を惹き付けて此の人口論に興味を懷かせるに至るであらうと確信する次第である。

## 二 原著者未詳なる事由

最初にハンセンの著作に就いて新刊紹介を試みた人物はロツシュ Losch, Hermann Julius (1867— ) であつた。之は原著發行の翌年一八九〇年秋の雜誌に於てであつて、彼は極力この著書の推賞に努め、爲めに數頁を割いて論じてゐる位であるから、當然にハンセンの素性に就いては知悉して居る筈であるのに、何故か此事に關しては一言も觸れて居らない點より見れば、或は著者を語る必要を認めなかつたのか、若しくは著者を知らずとも著書の紹介には差支ないとの見解の兆候とも見做されて、頗る興味深い事實である。

次にハンセン説を利用し宣傳するに(實は色彩的結果になつたのだが)與つて力のあつた所のアンモン Otto Ammon (1842—1916) も其の著書に於てはハンセンの出身を全く問題とはして居らない。唯最後にハンセン・アンモン説の統計的批判を試みたるクッチンスキー Kuczynski, Robert René (1876— ) の指摘せる所に依れば、恐らく當時

- 6) 高野岩三郎著 社會統計學史研究、第一卷、昭和四年八月、三十三頁。  
1) Hermann Losch; Besprechungen von 3 Bev.-stufen, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. Jg. 40, Leipzig, 1890, S. 997—S. 1001.  
2) R. R. Kuczynski; Der Zug nach der Stadt, Stuttgart, 1897, S. 75, S. 77.

の農業雜誌上の論文又はバーデン地方新聞紙上の記事に於て、アンモンはハンセンをハムブルグ Hamburg 生れの既に逝ける經濟學者ゲオルク・ハンセン Georg Hansen (1806—1894) と思ひ誤つて居たらしいのである。この兩者は頗る混同され易いと思えて、Hansen を Hansen と綴つて居る文獻も少なからず見受けられるのであるが、農業史家として有名な Hantsen の數多き著作中には Die drei Bevölkerungstufen なる人口論著が見出されないばかりでなく、逆に Hansen の著書中に Hantsen の著作なる農業史論綱 Agrarhistorische Aulandungen の引用が爲されて居る事實から推斷すれば、この兩者の同一人に非ざることは既に明白であらう。

唯斯る混同の依つて來る所以は Hansen を等しくハンセンと呼び、ハンゼンと讀まなかつた點にあるであらうと判斷されるに過ぎないのである。此際に於てクッチンスキーに依つて指摘されたる事實は、前後數回に互る斯説紹介の文獻中に殆んど觸れられなかつた點であるだけに、頗る注目に値すると共に、同氏の比較的嚴密なる立場を示すものでもあらう。即ちクッチンスキーの著書の發行されたる一八九七年當時に於て、問題のハンセンはミューンヘンの國立圖書館に文書官として健在であつたと云はれてゐるのである。<sup>3)</sup>

其後再び原著者を理解して之を紹介せんと試みたる者なく、原著者に對する無視が続けられて行つたのである。就中此著の複刻者クレーマーの責任は可成り重大だと考へられるので、茲に彼の場合を幾分委しく評論して見よう。

一九一五年複刻版を第二版と同じミューンヘンに於て發行せるクレーマーはストットガルト南郊ホーヘンハイム高等農業學校に奉職してゐたのだから、其のウウルテンベルグ州に相隣れるシュワーベン州のノイブルグで二十

3) „Das Land“ Nr. 17 und 18, 1. und 15. Juni, 1895. S. 261.  
„Badische Landeszeitung“ Karlsruhe, den 30. Mai, Nr. 125 I. Blatt.

4) G. Hansen, a. a. O. S. 97.

5) Kuczynski, a. a. O. S. 76, (脚註參照) Wie ich erfahre, lebt Georg Hansen trotzdem als Reichsarchivassessor in München.

五年前のハンセンの行方を確かめる事は頗る容易なるにも拘らず、彼は之を爲さないばかりでなく、其の序文中には徒らに大戰の動亂最中に於けるハンセン説の意義を強張するのみで、アンモンやワグナー其他の斯説への反對者を掲げ乍ら、何故かクッチンスキーの名を逸して居る。當時は大戰勃發して八ヶ月目であるから、或は人物考證の餘裕がなかつたとは云へ、クッチンスキーの反駁書はクレーマーの複刻序文に先だつこと十七年半前ではあるが、著作の場所で云へば恰度クレーマーの場合と逆にミュンヘンで書かれ、ストットガルトで發行されて居り、孰れにしてもさう遠隔の地ではないから、苟くもハンセンの複刻版を出せる彼が之を知らなかつた筈はないであらう。若しさうとすればクレーマーのクッチンスキー(當時は恐らく伯林に居たであらうか)\*無視は全く故意であつたと見做され得よう。

斯の如く原著者並びに其の著書に對する痛烈なる反駁者を無視して居る複刻者に、原著書への理解を求めることは、云はゞ木に倚りて魚を求むるにも似た困難を伴ふであらう。吾々はこのクレーマーの態度を不可解と思ふと共に、當時に於て恐らくハンセンは既に他界して居たのであらうと想像されて、唯この原著者の數奇なる運命を偲ぶばかりであつた。

我國に於けるハンセン説の最初の紹介者である米田先生は、其の出身に關しても先鞭を着けられ、デンマークの學者ハンゼンは甚だ興味ある研究を公けにしたと述べられ、<sup>6)</sup>斯説の概要をも説明して居られる。蓋し其の論據とせられた所は恐らくギッディングス以來の米國社會學會の傳統に従つて、通稱をハンゼンと讀まれ、又北米移民中の類似名者の出身地域の聯想から丁抹人と書かれたのであらうから、斯う云つた事情を米合衆國に於ける書

\* 現存獨逸人の所在に就ては Degeners 'Wer ist's?' X. Ausg. Berlin, 1935に依る。例へば上掲クッチンスキー氏に關しては同書 903頁に 1906-21年の期間は Berlin-Schöneberg に居たと誌して居る。

6) 米田庄太郎著『現代人心理と現代文明』京都、大正八年、618頁、參照。

籍に依つて窺つて見る事としよう。

一九二九年紐育に發行された「都鄙社會學原論」には、チンマーマンに依つて數十箇所のハンセン説引用を見出すのであるが、悉く George の名を George に翻譯して居る有様である。そこで試みに之を米國人名辭書に索引して見ると、<sup>8)</sup>獨逸國ハンノーファーなるヒルデスハイム Hildesheim in Hanover 出身の陶藝家ジョージ・ハンセン (George Hansen 1863—1908) を見出す、併し乍ら吾々の追求して居るハンセンの移植民政策からすれば、彼は決して北米移民の中に介在する筈はないから、之も人口論者ハンセンでないことは明瞭であらう。

序に斯る人名考證の杜撰なる例を其の共著者ソロキンに求めると、彼等をしてハンセン説を知らしめた媒介者であるアンモンに就いて社會科學辭典中に次の如く書いてゐる。<sup>9)</sup>即ち彼を Alfred Otto Ammon として、經濟學者アンモン Alfred Ammon (1883—) と人類學者アンモン Otto Ammon (1842—1916) とを混同して居る始末である。

斯くしてハンセンの傳記探索の旅に迂路を辿つた筆者は、漸くにして、獨逸語で書かれた本を其の祖國に於ける文獻に當つて見る事となつた。

ハンセンの著書の發行地たるミュンヘンと同様に出版都市であり、殊に彼が其の出生地別統計を借用せる中獨の萊府 Leipzig を誕生地とする所の二文獻に従へば、<sup>10)</sup>我がハンセンには人口論著と共に次の著書があつたと併記して居る。題して「獨逸勞働者と社會デモクラシー」と云ひ、一八九一年の發行であるから、「人口三段階論」と二年の間隔を置くのみであり、或は同一人の著作かと思はしめるに足る様であるが、併し念の爲に同書を調べて見ると、同姓同名であり乍ら、全く異ふ人物である事が分る。若し注意深い眼を以てするならば、先づこの著者には學

7) Sorokin & Zimmerman; Principles of Rural-Urban Sociology, N. Y. 1929, pp. 529-604.

8) Dictionary of American Biography, Edited by D. Malone. Vol. VIII, N. Y. 1932, p. 229.

9) Encyclopaedia of the Social Sciences; Editor in Chief E. R. R. Seligman.



位がなく、次に其の副題を「一介の勞働者の其の同僚に與ふる警告」として居り、發行の場所が柏林となつてゐるといふ三點から別人たるを知る事が出来るであらう。猶疑ふ人の爲に念を入れて其の全文に眼を通して見ると、其の序文中に於てこのハンセンは肉體勞働者としての自己の經歷を略述したる後に、此の僅か八十頁に過ぎざる小冊子は自分の出版せる最初の著述であるから、讀者の最大なる寛恕を希望して居り、<sup>11)</sup> 勿論其本の中で前著を引用して居る筈はないのである。

以上人口論者ならざる三人のハンセンを挙げたが、ハンセン博士の姿は杳として見當らず、唯吾々の知り得たのは恐らくは二十世紀初頭までは生存し續けたであらうと、十九世紀末までに死亡せる主要獨逸人名簿中に載せられて居ないといふ間接な事實から、<sup>12)</sup> 推測を下し得るばかりであつた。

### 三 發見されたる略傳の記述

抑々學說の紹介に際して何故に著者の傳記を添ふ必要があるのかと問はれると、誰でも其は必須なものではなく、著者を知るは著作を解するの便宜的手段だとしても返答するであらう。吾々も既往の多くのハンセン説紹介者に於けるが如く、全く之に觸れずに置けばよかつたのかも知れないが、其では彼を人口論者と銘打つて理解する事すら躊躇せねばならないであらう。殊にハンセンが獨逸の人口調査に於て出生地項目が附加されて以來、之を最も徹底的に活用して、人口論に於ける國內移住や特に都鄙人口周流の意義を解明せる人物であつて見れば、猶更彼の出生地の不明なる事は其自身皮肉でもあり、吾々が單なる傍觀者となつて了ふといふことは頗る殘念で

Vol. II, N. Y. 1930. P. 36, (P. A. Sorokin).

10) W. Heinsius, Allgemeines Bücher-Lexikon, Bd. 19. 1889-92. A-K. Leipzig, 1893, S. 517. Dr. W. J. Gensel; Katalog der Bibliothek der Handelskammer zu Leipzig, 1895, III. (1888-1893) S. 327.

11) Hansen, Georg; Der deutsche Arbeiter und die Socialdemokratie, Mahnruf

あると謂はねばならぬ。

斯くて全く五里霧中に迷へるかの如きハンセンの略傳が全く偶然にも一九一一年の著名物故者履歷を掲載せる唯一冊の本<sup>1)</sup>から發見されるに至らうとは、夢想だにもしなかつた所である。茲に偶然の發見と云ふのは、十九世紀初頭の毎年の主要死亡者を掲載せる各卷を参照し得なかつたからであり、又同書の簡単な記録には著書の有無すら書いてないからである。故に此の人物が果して人口三序論の著者なりや否やは、次節の論證を俟つて初めて推定され得る事項だから、本節に於てはこの略傳の主人公と人口論者を結付ける事をしないで、只管その史實を一般ドイツ史<sup>2)</sup>や最近の獨逸地圖<sup>3)</sup>を参照して敷衍する事としよう。

北歐に突出して北海と東海(バルト海)とを分け隔てゝ居るかの如きユトランド半島の頸部を扼する要衝にシュレスウイヒ・ホルスタインの兩公國があつた。此の兩國は歴史的には所謂「永久に不可分離なる」關係にあつたのであるが、一八九五年にキール運河 Nordseekanal が開鑿されるや自然に兩方の海は連絡せられ、地理的にはシュレスウイヒはホルスタインと分れて、デンマークと共に島國に化したとも謂ひ得られよう。扱この運河をウイヘルム帝運河 Kaiser-Wilhelm-Kanal と稱し奉るのは、これより曩の一八八一年にシュレスウイヒ・ホルスタイン公フリードリヒ七世の女、アウグステ・ヴィクトリヤ Auguste Viktoria (1858-1921) と御成婚遊ばされしウイヘルム二世 Wilhelm II (1859- ) が、其の皇帝御即位後に於ける大海軍擴張計畫に基かせられた御事業であらせられたからであらうか。斯る因縁を有するに至つた運河を、若し東海に臨むキール軍港から西へと這入つて行くとすれば、數十軒の航程で都邑レンズブルグに達し、更に西へ五軒餘り運河沿ひに進めば、北岸に當つて

eines deutschen Arbeiters an seine Genossen, Berlin, 1891, S. VI.

12) Allgemeine Deutsche Biographie, Generalregister. Bd. 56. Herausgaben durch die historische Commission bei der Königl. Akademie der Wissenschaften. München und Leipzig, 1912, S. 122.

1) Biographisches Jahrbuch und Deutscher Nekrolog, herausgegeben von Anton

ニービュルと稱した村落 Niebüll b. Rendsburg を見出すであらう。此處は現在はヌーベル Nübel と稱せられて居るが、之が問題のゲオルク・ハンセンの誕生地であり、時は一八二六年九月六日であつた。

世に子なき人はあつても親なき子はない筈ではあるが、ゲオルクの両親に就いては幼少時代に於ける彼の生立と共に全く知る由もないのである。吾々は唯當時に於ける風雲急なる北歐の天地から想像して、此間の事情を補足して見るに過ぎない。其頃漸く衰へを見せ始めたとは云へ猶老大國たる貫祿を示せる丁抹王國と、新興の意氣に燃ゆるが如き普魯西王國や中歐に隱然たる勢威を有する奧太利帝國の三國が相鼎立せる間に介在して、シュレスウイヒ・ホルスタイン公國の運命は決して安穩たる筈はなかつた。

一八四八年時の丁抹國王クリスチアン八世没せらるゝや、女系の支配者が置かれて四百年來の君合國シュレスウイヒ・ホルスタインに臨まんとしたのを契機として、忽ちこの兩公國に獨立戰爭の焰が燃え擴がり、幾度か普魯の將軍と其の軍隊の力に依る丁抹からの獨立成就と其との休戰條約とを繰返したる模様であるが、後に再び丁抹軍の侵略する所となり、遂にはシュレスウイヒが完全にホルスタインから分離させられるの憂目にすら逢つたのである。これに激昂した兩國民は此度は全く獨逸軍隊に依存せず、自力で丁抹と戦端を開き散々に撃破されて了つた事がある。<sup>4)</sup>

其の時は一八五一年であり、シュレスウイヒ・ホルスタイン聯合軍の一將校として祖國の爲に戦ひつゝあつたゲオルク・ハンセンが、戦傷の姿を見出したのは、首都シュレスウイヒの北郊十軒餘り離れたイドステッドの會戦に於てであつた。<sup>5)</sup>斯くて齡二十五に過ぎない青春の身を名譽の負傷に横たへつゝ、其後如何に更生の歩みを惱

Bettelheim. Bd. XVI. (Totenliste vom 1. Januar bis 31. Dezember, 1911) S. 29, Berlin, 1914.

2) Ludwig Hahn; Leitfaden der vaterländischen Geschichte, Berlin, 1906.

3) Meyer's Lexikon, Bd. 12. Atlas. 1936. S. 11. Mecklenburg und Schlesw.-Holstein.

4) 秋山六郎兵衛著「概観ドイツ史」235--237頁、参照。

んだかの徑路は全く記録されたる資料を缺ぐので、吾々は之以上敘述出来ないのを残念に思ふ。

併し乍ら彼の永き生涯は猶これから始まると考へられるから、今暫らくシュレスウイヒ・ホルスタインの歴史事情を背景として、彼の姿を追求して見よう。ハンセンが前半生の運命を共にした小さき祖國シュレスウイヒ・ホルスタイン公國は、一八六四年に至つて一應は丁抹の羈絆から離脱したけれども、之に代つて事實上是普墺兩國の勢力範圍として夫々割讓さるゝの運命にあり、この兩公國の不可分關係は再び危機に直面したのであるが、遂に幸にも一八六六年の普墺戦争以後に於て、この兩地域は完全に一緒になつて普國を盟主とする北獨逸聯邦に合體し、一八七一年以後に於ける大獨逸帝國を、吾々はゲオルク・ハンセンの大きな祖國と見做し得るに至つた。斯くてこの新氣運に融和し、獨逸民族として更生し來つた彼は、既に新教牧師としての素養もあつたからではあらうが、忽ちにして伯林に於いて宮中牧師長の地位に昇進して居た模様である。禍福は糾へる繩の如しといふ譬へに洩れず、彼が五十歳の時にその地位を退いて、一介の宮庭僧の職に逆戻りしたものと如くである。此事實は恐らく時の宰相ビスマルクの宗教斷歴にでも基因するのであらうが、委細は空想を許さない。そこで吾々は其の後の一世代の空白を彼の傳記に残して置く外はないのであらうか。<sup>5)</sup>

ゲオルク・ハンセンの一生に於ける出來事としては戦傷と職業の二つを知つた以外にはなく、彼の婚姻關係從つて子孫の有無に關しても全く不分明なる儘に、一九一一年一月十七日に滿八十四歳四ヶ月、日本流の數へ年では八十六歳の高齢にて永眠して居るのである。場所は中獨のオーバーフランケン州内のチューリンゲン寄りの靜かなる町コーブルグ Koburg に於てゝあつた。この町は實に舊バイエルン王國の北端に位してゐるのである。

5) Hansen, Georg, als Offizier d. schlesw.-holst. Armee im Gefecht b. Idstedt verwundet.

6) L. Hahn; a. a. O. Aufl. 25. S. 227.

7) Hansen, Georg, Dr. theol., Oberhofpred., 50 Jahre kob. Hofgeistl.

8) Kirchliches Jahrbuch, 38659, (1911) 悉細はこの教會年報に依る外は調査

以上大體に於て事實の發生順に述べて來たのであるが、最後に殘る疑問は彼が何時頃に神學博士 Dr. theol. となつたかに關聯してゐると思はれるから、吾々は之を次節に於て詮索するであらう。

#### 四 傳記補遺の論據

上述の略傳に於て、戰傷の時は事實に鑑みて一八五一年從つて彼の二十五歳と推定し得るし、宮中牧師長より宮庭僧侶になり下つたのは彼の五十歳の時であるから、大體に於て一八七六年と見做されるのであるが、神學博士の稱號獲得の如き個人的事實は一般歴史上からは推察も出來ないのである。從つて神學博士は或は地位や職掌柄與へられたものとすれば一八七六年以前であるが、恐らくは神學的教養の成果であらうから、其の學位論文の探索が必要である。斯くて見出された次の述作は其に價するものと見做され得るであらう。

「一五二七年終末に於ける新教運動に對するアッゲスブルグの役割」なる論文が發表されたのは、一八八一年のミュンヘンに於いてであつた。此の事實を掲げた佛蘭西人の文獻には明らかに「人口三序論」を前記神學論文と同一著者の作だと見做して居るのは、頗る意味深く思はれる。吾々は今この神學に關する論文を参照し得ないので確言すべきではないであらうが、併し獨逸人の文獻中に舉げられた小冊子よりも、佛人の指摘せるこの小論文の方が一層我がハンセンに似合つてゐると思はれる。

されば一七七六年以後伯林に於ける榮職を離脱せる彼が北獨逸より南獨逸へ移住せる際の最初の學問的成果としてこの神學論文を認めても差支ないであらう。時に五十五歳に達してゐたハンセンはこの論文を契機として學

方法がないのであるが、未だ參照の機會を得ないのは遺憾である。

- 1) Dr. Georg Hansen; Der Anteil Augsburgs an der evangelischen Bewegung bis zum Schluss des Jahres 1527, München, 1881. In-8° 32 p.
- 2) Paul Catin, Éditeur; Catalogue général des livres imprimés de la bibliothèque nationale, Tome LXVIII, Paris 1929, S. 516.

問的精進を續行し、其の頃の人口統計學的諸著作が緯となり、既往の人生體驗が經として織り込まれて、六十三歳の時に漸く次の人口論者として結晶したと考へられる。晩學なる彼が還暦の齡を超えて後に、中部歐洲を東流し遂には黒海に注げるドナウ河邊なるノイブルグでこの著述を出したのであるから、其の後八年を経過し、七十一歳にして猶嬰鑠としてミュンヘン市の帝室圖書館に勤務して居つたとしても、何等不思議ではない。又彼の晩年の心境からすれば、グッヂンスキの統計技術的批判に答へる必要は毛頭感ぜられなかつたであらう。蓋し學問の紹介批判と論争が所謂の學壇を背景とし、教職に従事する學者のみに特に顯著であるとすれば、ハンセンの如き宗教的世界に在つた者に採つては、世上の毀譽褒貶の如きは何等意に介する必要もなかつたと云へよう。況してや彼の人口理論に執りては時と所の差異に拘らず都市人口二代更新の有無に關する計算の成立するか否かは、其自身既に問題とするに足りなかつたからでもあらう。

吾々は最後にハンセンの著作中に引用されたる文獻又は用語が、上述の略傳と矛盾せざる所以を指摘して、この略傳と著作とを結付ける論據としたいと思ふ。彼がシュレスウイヒ生れる事實は、姓名の地域的分類からも大體首肯される如くではあるが、彼の人口に關する著作中に慣用されたる語句がホルスタイン系統 *Holssteinisch* であるとは、吾々外國人には一寸判斷し兼ねる點である。併し幸ひにも彼が歐洲各國の人口史を驗證したる章に於て之を知る事が出来る。即ちハンセンは英米の文獻は悉く獨逸語の譯本を参照して居り、佛蘭西語の文獻は利用しても居らず、又佛語を解して居らぬとも考へられるのに、獨り和蘭を論じたる場合に限つて、蘭語 *Niederfankisch* を其儘に引用して居る事實は、この著者の解し得た言語を北ドイツ系統 *Niederdeutsch* と推定せしむる所以と

3) Hansen. a. a. O. S. 31, Kuczynski a. a. O. S. 76.

4) G. Hansen, a. a. O. S. 282 Pieter Delacouet; Aanwysing der heilsame politieke Gronden en Maximen van de Republike van Holland en West-Vriesland, Leiden und Rotterdam, 1671.

ならう。これが出生地と著作に現はれたる言葉との關聯の一端である。

(註) ハンセンは其著書中(四〇二頁)にルイ十四世 Louis XIV がノドウィヒ Ludwigs XIV と誤植されてゐる。これを以て佛蘭西語を知らぬと云ふは些か酷に過ぎるであらうが、少くとも之と親しまなかつた事が彼の出身地を中獨や南獨と區別する所以と見做され得るであらう。

次にハンセンの著作の源泉資料となつた書籍の發行年次から、大約乍ら彼の人口論考察の時期を推定して見る事とする。先づ萊府市の出生地別毎五歲階級別人口統計材料の公表された一八七七年<sup>5)</sup>や、マルサス人口論の獨譯刊行の一八七九年に始まり、エッチンゲンの道德統計學<sup>6)</sup>の發行された一八八二年や、マイヤーのバイエルン人口に關する統計書が其後も別人に依りて繼承し續刊された一八八三年に終る頃が、大體に於てハンセンの考察研究の開始されたる時期であらう。若しハンセンの神學的教養の徵表を彼の人口論著中に求めるとすれば、バイエルン諸都市に於ける新舊兩教徒の地域的分布の差異を、各都市の周郊にある田舎地方の信教構成で解説し、以て都鄙人口周流の傍證としてゐる點に求められるであらう<sup>7)</sup>。此の際に於て既述の神學論文の引用が爲されなかつた理由は、恐らく其の必要が認められなかつたからであらうし、其の人口論著に單に博士とのみ書いて神學博士と斷らなかつた所以も、神學に關する著書に非ざる以上頗る自然の首肯され得る處置でもあつたであらう。

猶ハンセンの若き時代に於ける戰爭の體驗が如何に彼の人生觀の中に滲出して居るかを、著書に於ける結語「人口周流と文學」なる章中に探つて見よう。彼は獨逸に於ける十三世紀の第一次文學時代が十字軍遠征のお蔭であるとしたと同様に、第三次の文學時代は十八世紀の所謂三十年戰爭に負ふものであると語つた後に於て、この兩方の場合に於いて戰爭の影響は人口周流の促進であると述べてゐる<sup>10)</sup>。斯くの如く戰爭に對する肯定的なる觀念

- 5) ibid. S. 22. Heft XI der Mitteilungen des statistischen Bureaus der Stadt Leipzig, 1877.
- 6) ibid. S. 3. T. R. Malthus; Versuch über das Bevölkerungsgesetz, übersetzt von F. Stöpel, 1879.
- 7) ibid. S. 18, A. v. Oettingen: Die Moralstatistik. Aufl. 3, 1882.

の發露が見出されるから、歐洲大戰の最中に特にクレーマーに依る本著作の複刻が試みられたのもあらうか。斯くて北獨に生を享けた彼が、戰場から宮庭の官職へ移り、後に南獨に住むやバイエルンを研究地盤とせる人口論の著述を出し、晩年を中獨に於ける靜かなる宗教的環境に送つたといふ生涯を概觀するを得たのである。

## 五 結

### 論

以上要之、ハンセンの傳記の判明せざる理由を或は彼が世の中からかくれて居たのであらうとか、若しくは著者の運命が然らしめたのであらうから致し方がないと諦めて了ふ事を止めて、其の著書發行されてより五十年を滿願の機會として、何處までも宿命の著者の姿を追求する事に依り、遂に恐らくは原著者ならんと推定さるゝ人物の略傳に巡り逢ふを得たのである。そこで概略乍ら之を前後の歴史關係から解説を試み、次いで彼を以て人三序論の著者と見做す理由を若干舉げて來る事に依り、愈々其を確信するに至つたのである。

顧みて類似同姓名多きハンセンの中から、斯々の人物はこの人口論の著者にあらずと論證する場合は比較的簡単に済む様であるが、最後に唯一無二のゲオルク・ハンセンを確認する場合は決して容易ではない。従つてこのハンセンの略傳に關するさゝやかなる考證も決して斷定的なものではない。唯甚だ暫時的な意見に過ぎないとは申し乍ら、猶筆者の主張したいのは、多くの讀者が著者と著書の運命を混同する事なく、少くともこのゲオルク・ハンセンが人口三序論の著者にあらずと論證し得る人が出るに至るまでは、永久にこの紹介を信じてこの著作を新しく繙讀すべきことである。

8) *ibid.* S. 12, Dr. v. Müller: Heft 46 der Beiträge zur St. des Königreichs Bayern, München, 1883.

9) *ibid.* S. 33.

10) *ibid.* S. 405.



ゲオルク・ハンセンは自著の序文を結ぶに當つて曰ふ<sup>1)</sup>。

「渾沌たる政治的見解に秩序を齎さんとする余の目的が達成されたか否かの判讀は全く讀者に委ねらるべきであらう。兎にも角にも著者としては正しい進路を踏み締めて來た積りであるから、首尾一貫を缺ぐ説であるとの非難は恐らく受けないで済むであらう。」

斯の如く著作目的以外には殆んど語らず、結果の判斷を讀者に俟つの謙讓なる態度を示し、著者一身の事項に關しては序文中に一言も觸れて居らぬにも拘らず、其の自説を信する事の堅きに吾々は深く打たれるのみである。蓋しハンセンなる人物は内面的には稀有の深味を湛へ乍ら、外面的には何等の粧ひも見せないと言ふが如き宗教家の一典型を偲ばしむるものがあり、凡そ自己宣傳や賣名に類する行爲に縁遠い人物であつたのであらう。然らば斯の如く彼の素性を洗出す行爲は或は先賢の遺徳に疵を負はすものではないかをさへ畏れる程である。併し乍ら彼が精魂を凝らせる結晶と思はれる著作は發表されてから茲に五十年、假令普通の意味での獻辭は全くないにしても、序文に於て判讀を一任されたる讀者即ち獨逸國民は一體何を以て彼に報ひたであらうか。

彼の著作の評價に就いては別に述べる積りではあるが、彼自身或は世を遁竄せんとする意識の有無を詮索する必要もなく、唯既に發表されたる著作は今日と雖も猶馥郁たる香氣を發して居る限りに於て、彼の奥床しい全生涯が偲ばれるのは、誠に自然の成行として宥恕せらるべきであらう。茲に敢て不備なる傳記を添へるのも、原著者への敬愛の衷情に外ならず、之に依りて一般俗衆の眼から全く看過され、聽ては忘却の淵に沈淪し果てんとしたる十九世紀末葉の一人口論者なる我がハンセンに對して、世の有識者の根強き關心を植付け得れば、本文の

1) Hansen, a. a. O. S. V.

使命も亦達成されると謂ふべきであらう。

## 六 追 記

因みに語ることを許されるならば、彼の傳記を探求すること茲に數年、遂にこの略傳を見出してより後も猶一年有餘の期間を、この書籍の原著者として彼を確認するに至る迄に空費せねばならなかつたのであるが、彼の生誕以來滿百十三年従つて第百十四回目の誕生日を迎へたる秋に當つて、彼の著作中の第三編第八章に於いて、第十九世紀に於ける、獨逸の現狀を敘述せる際に、<sup>1)</sup>恰も本文の問題とせるシュレスウイヒ・ホルシュタイン州の農業狀態に言及して、餘りにも明瞭に此處を我が故郷と呼んでゐる事實を知つた喜びを、我が讀者にも頒ちたいのである。

若し之を以て既述せるが如き本論證の迂濶さを責める人があるとすれば、ハンセン自身がこんな箇所に於て其の出身地を語つて居ようとは、解説者に採つて全くの不覺であつたと認めると共に、原著者すらも斯る結果を見透して居た譯ではなかつたと謂はねばならぬ。何故ならば單に地名のみを挙げれば足る場合に於て、猶不知不識の間に當該地域と個人との宿縁を述べねばならなかつた所に、實にたくまざる人間性の流露に觸れ得たる心地がして、轉た感慨無量なるものがあるからである。敢て之を附記する所以は、一には全文の論調を破らぬ爲でもあり、他面に於てはこの研究の時間的經過を自ら物語るものでもあるからであらう。

1) G. Hansen, a. a. O. S. 317.